この画像は著作権の関係で表示できません。

2005年10月23日発行

2005年度秋季展　戦後60年展②

野人政治家　風見章の生涯

(非売品)

編集・発行

早稲田大学大学史資料センター

Waseda University Archives

〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１－６－１

Tel: 03-5286-1814　Fax: 03-5286-1815

http://www.waseda.jp/archives/

©2005 Waseda University Archives.

3,500部　　不許複製

早稲田大学大学史資料センター　秋季企画展

野人政治家 風見章（かざみあきら）の生涯

知っているだろうか？「風見章」という政治家を。

日中戦争、新体制運動、ゾルゲ事件など、昭和戦前期の数々の重大事件の渦中にいた風見章。泥沼の戦争へと突入していく時代に、彼は何を考え、そしていかに行動したのか？鉄の信念と責任感を併せもった政治家風見章に、今スポットライトを当てる。

戦後60年展②

期間：2005年10月23日㈰ ▸ 11月19日㈯　入場無料

会場：早稲田大学 西早稲田キャンパス　２号館　１階　企画展示室・大隈記念室

時間：平日は10時～17時　土曜は10時～14時

休館：日曜・祝日　ただし、10月23日および11月6日は開館

お問い合わせ先：03 (5286) 1814　http://www.waseda.jp/archives/

2005年度秋季展　戦後60年展②

野人政治家　風見章の生涯

はじめに

「風見章」という人物を知っているだろうか？
今やほとんど語られることのないこの政治家に、私たちはスポットライトをあててみようと思う。
早稲田を卒業後、さまざまな職業を経験することでその眼力を鍛え上げ、ジャーナリストとして、また政治家として、日本の政治・社会の改革に生涯を捧げた風見章。中国との戦争を抑えられなかったことに、政治家としての責任を誰よりも痛感していた風見の言葉は、今、何を問いかけるであろうか？

展示の趣旨をご理解いただき、貴重な資料の出陳を快くご承諾いただいた関係各位のご厚情に、心より感謝申し上げたい。

早稲田大学大学史資料センター

※展示期間中、展示品の入れ替えなどを行なう場合があります。

1940年10月（風見博太郎氏所蔵）

1　学生時代とその後

この画像は著作権の関係で表示できません。

大隈重信との記念撮影
1909年５月　○囲みが風見（風見博太郎氏所蔵）

1886年２月12日、風見章は茨城県水海道町高野の農家に生まれた。風見の波瀾の人生は、早くも中学時代に幕を開ける。下妻中学３年の時、抑圧的な校長の排斥運動を仲間らとはじめ、放校処分を受けたのである。
その後編入した水海道中学を経て、風見は1905年４月早稲田大学高等予科に進学した。講義にはほとんど出席しなかったが、英語とフランス語の勉強に没頭し、また杉浦重剛の称好塾に起居して漢学に励んだ。風見は早稲田で二人の友を得た。中野正剛と緒方竹虎である。三人は互いをライバル視しつつ、終生の友となっていく。
早稲田を卒業した後、風見は職業を転々と変えた。東京日日新聞社外寄稿家、株屋山栗の名古屋支店長、東京市電気局長秘書、大阪朝日新聞外報部員、雑誌編集者、国際通信社員、信濃毎日新聞特約寄稿家など、ひとつの職に安住することなく、天職を探し求めた。貧しくはあったが、そうした経験の積み重ねが風見の眼力を鍛えていった。
1923年１月山路愛山、桐生悠々ら硬骨の論陣で知られる信濃毎日新聞に、風見は主筆として招かれた。以後５年、信州を舞台に風見は縦横無尽にその筆をふるうことになる。

[展示資料]

回想記「中学時代」
風見博太郎氏所蔵

回想記「早稲田大学時代」
風見博太郎氏所蔵
早稲田を選んだ理由について、風見は「一つには学費の関係から出来るだけ短い期間に卒業する必要があつたのと、又一つには謂ゆる入学試験勉強が嫌ひであつた」からと回想している。

中野正剛・緒方竹虎揮毫帳
風見博太郎氏所蔵
風見章（1909年大学部政治経済学科政治専攻卒）・中野正剛（1909年大学部政治経済学科政治専攻卒）・緒方竹虎（1911年専門部政治経済科卒）の3人は大学時代からの親友で、いずれもジャーナリストから政治家への道を進んだ。

中野正剛(右)と共に
(風見博太郎氏所蔵)

杉浦重剛扁額（為書風見章）
風見博太郎氏所蔵
1905年9月風見は杉浦重剛の称好塾に入塾した。風見はこの扁額を終生掲げ、杉浦を偲んだ。

風見章回想

二十四で世間に出て、二十七までの間に東京日日記者、株屋の番頭、一年志願兵、翻訳売文、東京市電気局雇員とわたりあるいて、二十八の春に大阪朝日の記者。こんなことで年をとつてはやりきれぬと三年ほどでやめてしまつて、三十一から三十五までの間に、雑誌経営、印刷屋、貿易商の真似事から自動車まがひのガソリン軽便車の製造などまでやつてみたが、どれもこれも失敗で、三十五の冬から三十六の冬まで国際通信大阪支局主筆を一年ほどやつてみたものの、これで人生をすりへらしてはたまるものかと尻に帆をかけ、大阪を去つて上京、浪々生活、こいつに行きつまつて都落ち、信濃毎日新聞主筆になつたのが三十八。……
（『文化茨城』26号、1949年2月1日付）

2　信濃毎日新聞主筆から政界進出へ

信濃毎日新聞主筆時代
1926年2月
(風見博太郎氏所蔵)

信濃毎日新聞主筆としての風見は、普通選挙運動をバックアップし、労働者や農民の側に立った論陣を張った。風見は紙面を通してだけでなく、山深い農村地帯で活発に講演会を開き、農村が抱える問題について農民たちと語り合った。

風見が信州での5年に及ぶ記者生活を終え、政治家として社会改革のために残りの生涯を捧げることを決意したのは、普選最初の総選挙実施のひと月前のことであった。

1928年2月風見は郷里の茨城三区から総選挙に出馬した。結果は惨敗だった。風見は小さな新聞社を経営する傍ら、次期総選挙を待った。選挙区をしばしば回り、人びととの座談会を重ねた。その結果、“風見党”と呼ばれる熱心な支援者が県内各地に生まれた。

雌伏2年、1930年の総選挙で、風見は立憲民政党よりトップ当選を果たした。民衆の声を国政に反映させるべく、風見は政治家の道を歩み出した。44歳にして、ついに天職を得たのである。

[展示資料]

回想記「信毎時代」
風見博太郎氏所蔵

第一回農村自由講座チラシ
1929年7月　志冨實氏所蔵
1929年8月風見が唱導していた農村自由講座が、水海道町菁莪学館で開かれることになった。風見は農村社会学を担当した。

第十七回選挙
議員バッジ

第十七回選挙　議員バッジ
1930年　風見博太郎氏所蔵
初当選時の議員バッジ。

第五十八回帝国議会衆議院議員席次表
1930年４月22日　志冨實氏所蔵

『第五十八議会報告書』
1930年　志冨實氏所蔵

風見の当選を喜ぶ支援者たち（風見博太郎氏所蔵）

3　政治の革新を求めて

政治家風見章が自らに課したテーマは、農村問題の解決であった。昭和恐慌の影響で農村経済が破綻寸前の状態にある中、風見は全国の農民から届く請願を取り次いで時局匡救議会召集（1932年８月）への道をひらくなど、窮乏にあえぐ農民たちを救済するため奔走した。

ちょうどその頃、風見は満州事変後の混迷する政治情勢を、政党政治では乗り切ることができないと思いはじめていた。政治改革への知見を深めるため、風見は学者やジャーナリストとさかんに交流した。尾崎秀実や細川嘉六らとのつながりは、こうしてはじまった。

1937年６月混迷を深める政治を立て直すべく、政界のプリンス近衛文麿が首相となった。近衛の満を持しての登場に、国民は熱狂した。そしてその近衛が、内閣の要となる内閣書記官長（現在の官房長官）に選んだのが、ほとんど面識のない風見であった。

近衛内閣誕生の興奮がいまだ冷めない７月７日、日中両軍の間で突如戦端が開かれた。北京郊外の盧溝橋ではじまったこの戦闘は、果てしない日中全面戦争へと発展していった。中国内で高まる抗日意識の実情を正確に把握していた風見は、戦争継続の難しさを誰よりも知っていた。1938年７月風見が尾崎秀実を内閣嘱託に抜擢したのは、まさに戦争処理の道筋を検討させるためであった。

風見は和平のチャンスを幾度となくうかがい、また戦争解決に指導力を発揮できない陸相らの更迭に関わった。だが、ついに和平実現を見ないまま、1939年１月近衛内閣は総辞職することになる。

［展示資料］

「如何にすべき農村救済策」『中央講演』1932年第４輯
1932年６月　志冨實氏所蔵
1932年６月17日早稲田大学大隈講堂で催された風見の講演録。風見は、「諸君。農村問題は今や世界の政治的中心問題たらんとしてゐるのであります」と語り始めている。

『南茨会報』第２号
1932年９月17日　志冨實氏所蔵
南茨会館は風見事務所の入っていた建物。五・一五事件後のこの会報には、「五・一五事件の愛郷塾頭○○○○氏捕はれてから、身の廻り一切褌の世話までやつてゐる風見さん。友人連が、誤解が危いと注意するが、『親友の世話して何が悪い』。ソレデコソわれらの風見」とある。○○○○とは、橘孝三郎のこと。

風見章書翰　今井彦蔵宛
1934年５月27日付　今井一弥氏所蔵
猿島郡飯島村の有力者今井彦蔵に、帝人事件をめぐる政界の混乱ぶりを伝えた書翰。

小笠原由松日記
1934年　大学史資料センター所蔵（小笠原襄二氏寄贈）
岩手県出身で早稲田に学んだ小笠原由松（1888－1948）は、1940年に上京し、中野正剛の政治活動を支えた。その1934年６月４日の日記には、「中野

（正剛）・風見・石原（莞爾）の三頭政治を造れ」という建白書を、それぞれに送ったことが記されている。

この画像は著作権の関係で表示できません。

筑波山にて。左から大越昌範、風見、尾崎秀実、落合寛茂、須田禎一、
森山喬、小沢正元、関口泰　1937年５月（風見博太郎氏所蔵）

選挙公報　1937年４月30日執行衆議院議員選挙茨城第三区

1937年４月　志冨實氏所蔵

風見は選挙公約に、農村問題の解決、政界の革新などを掲げている。

衆議院選挙用ポスター

1937年４月　志冨實氏所蔵

衆議院選挙用ポスター

日記

1937年６月～７月　風見博太郎氏所蔵

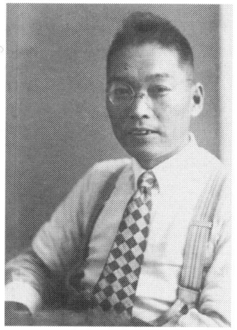
この画像は著作権の関係で表示できません。

第一次近衛文麿内閣組閣時
1937年６月（風見博太郎氏所蔵）

志冨靭負日記

1937年　志冨實氏所蔵

いはらき新聞水海道支局長だった志冨靭負（1899～1978）は、私設秘書として風見の水海道での政治活動を支えた。その1937年７月８日以降の日記には、風見の多忙振りが記されている。



志冨靭負
（志冨實氏所蔵）

陸軍省「宣戦布告ノ可否ニ関スル意見」

1937年11月８日　風見博太郎氏所蔵

外務省「対支宣戦布告ノ得失」

1937年11月８日　風見博太郎氏所蔵

4　新体制運動とその挫折

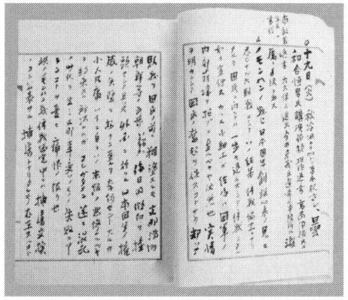
中国との戦争を終結に向かわせるには軍部を抑制しなければならない。ではどうすれば、それを実現できるか？　風見の考えは、国民を基盤とした新たな政治勢力を結集し、その政治力で軍部を抑え込むというものだった。

1940年５月風見は有馬頼寧らとともに、新体制運動を開始した。近衛文麿を党首とした新党の結成を企てたのである。近衛も風見らのプランに賛同し、新体制運動の陣頭に立つことを決意した。７月第二次近衛内閣が発足し風見は法相に就任するが、新体制運動は風見らの思惑とは異なる方向へと向い、10月大政翼賛会の結成を見るに至った。大政翼賛会の成立に風見は失望と挫折の思いを強め、12月近衛首相の意を承け、法相を辞任した。そして41年10月ゾルゲ事件での尾崎秀実逮捕は、風見を政治的苦境へと追い込んでいった。

尾崎逮捕から２ヵ月、日本は太平洋戦争へと突入した。12月８日の開戦の日、風見は「五年保つか、いや二年くらいかもしれぬ」と、戦争への不安を家族に語った。1942年４月東条政権下での翼賛選挙に、風見は立候補しなかった。12年に及んだ天職に自ら終止符を打ったのである。

［展示資料］

日記
1939年９月～10月　風見博太郎氏所蔵



日記
1939年９月19日付

橘孝三郎書翰　風見章宛
1940年２月16日付　志冨實氏所蔵
五・一五事件により無期懲役となった橘孝三郎が、小菅刑務所から差し出したもの。

日記
1940年５月～６月　風見博太郎氏所蔵
新体制運動開始に関する日記。

「時局所感」
1940年10月13日　志冨實氏所蔵
帝劇で開催された、大政翼賛運動に関する風見法相の講演録。

志冨靭負日記
1940年　志冨實氏所蔵
1940年11月14日の日記に、志冨靭負は「入れ替り立ち替り来客で面喰った。大臣と云ふ職責もこうヒマが無くてはやり切れない。大政翼賛会が何となく迫力に乏しいと云ふ評判だ。殿様芸ではどうにもしやうが無いので有らう」と記している。

肖像画

肖像画
宍戸章画　1941年　風見博太郎氏所蔵

「風見章・尾崎秀実　時局対談」『大陸』1941年３月号
大学史資料センター所蔵

『大陸』
1941年３月号

風見章事務所金銭出納帳
1941年１月～42年４月　志冨實氏所蔵

5　戦局悪化の中で

タカクラテル回想

オザキくんが所刑(ママ)されたことがわかると、松本慎一くんがすぐわたしの所へ訪ねてくれまして、ふたりでカザミさんを訪ねました。“そうか？とうとうやられたか？”それが最初のことばでした。“なんにもできなくて、ざんねんだが、これでもそなえてやってくれ。かれは酒好きだったから。”二本の洋酒をもちだしてきました。それを持って、マツモトくんがオザキ家をたずねたことでした。……

（タカクラテル書翰　水上文男宛　1973年１月31日付　大学史資料センター所蔵）

市井に戻った風見は、二人の親友に関わる事件で予審判事の尋問を受けた。ゾルゲ事件と横浜事件である。取調べを受けた風見ではあったが、尾崎秀実と細川嘉六という二人の親友への信頼は終生揺らぐことがなかった。

戦局が悪化しても、品川区東大崎の自宅が強制疎開区域となるまで、風見は東京にとどまった。若者が次々に戦場へ向い、人びとが日々空襲に怯える姿を見つつ、風見は自らの政治責任を痛感していた。こうした事態へ日本を導く羽目になったのは、そもそも中国との戦争をはじめ、その拡大を抑えられなかった当時の政治に責任がある、そしてその政治の中枢にいたのは、まさに自分であると。

1945年８月４日郷里水海道に疎開していた風見の下に、かつて近衛首相を共に支えた、牛場友彦と岸道三が訪れた。日本がポツダム宣言を受諾する方向で動いていることを伝えに来たのである。その数日後来訪した片山哲からは、講和政権樹立のための協力を要請された。戦争の早期終結のため上京を決意した風見であったが、出立の直前、敗戦の日を迎えることになる。

［展示資料］

歌集帳

1942年５月　風見博太郎氏所蔵

ゾルゲ事件公表に際して詠んだ歌。

「思はざる怪我したりけりたゞこれも好しとして己れ司馬徽を思ふ」

この画像は著作権の関係で表示できません。

家族と共に
1942年頃（志冨實氏所蔵）

日記

1943年８月～1944年３月　風見博太郎氏所蔵

1943年10月27日午後１時頃、風見は中野正剛の自殺を知り、ただちに中野の下へ向かった。

歌集帳

1943年12月　風見博太郎氏所蔵

1943年年末の歌。「いくたびか浮きつ沈みつみかへれば険しかりける道にもありけり」

日記

1944年12月～1945年５月　風見博太郎氏所蔵

1945年３月10日の東京大空襲の模様を、風見は「敵機いくたびか頭上を通過す。火災の焔雲をよび、それに反射して庭面昼の如し。時計の針を読むことが出来る。道向ふの銀杏の大樹がその反射光にあやしげに銀色をして立つを眺むるは、凄壮の感あり。一機目測三尺ほどの大きさにて、火災上空を飛ぶを目撃す。水族館の水中、大魚のひれを伸ばして急泳するを見るの概あり」と記している。この月末、風見は水海道へ疎開する。

落合寛茂画「百雪不如一点」

志冨實氏所蔵

落合寛茂（1897～1972）は、信濃毎日新聞記者時代に風見に心酔し、熱心な支援者となった。画を得意とした落合は、風見の似顔絵などを好んで画いた。「百雪不如一点」は、水海道で疎開中の風見を画いたもの。

この画像は著作権の関係で表示できません。

「百雪不如一点」

6　中国との国交回復を希求して

風見の眼に映じた敗戦後の日本は、まさに「敗亡国の悲哀」に打ちひしがれた姿であった。敗戦後、旧友らは風見を再度政治の舞台に立たせるべく上京を促したが、風見はそれらをすべて断った。戦争犯罪人として、国民からの裁きを受ける覚悟でいたのである。

1946年公職追放の処分を受けた風見は、敗戦の痛手から懸命に立ち上がっていくこの国の姿を、水海道高野の地からじっと見守っていた。だが冷戦の時代を迎え、再軍備の動きがにわかに慌しくなっていく情勢を、風見は座視することができなかった。

1952年10月風見は残された人生を平和国家の建設に捧げるべく、衆議院選挙に出馬した。15年ぶりの選挙戦であった。風見がスローガンに掲げたのは、平和憲法の擁護と日中・日ソ国交回復であった。戦争責任への痛切な思いが、風見を奮い立たせたのである。

この画像は著作権の関係で表示できません。

1952年初夏
（風見博太郎氏所蔵）

［展示資料］

回想記「ＧＨＱ行」

風見博太郎氏所蔵

ＧＨＱから出頭命令を受けた風見は、1947年２月26日上京した。ＧＨＱでの取調べを受けた後、風見を歓待したのは、牛場友彦、白洲次郎、西園寺公一だった。松本重治も参会の予定だったが、急用のため欠席した。

原稿「東京行」

1948年１月　志冨實氏所蔵

志冨靭負編集・発行の『文化茨城』1948年１月15日号に掲載された原稿。ペンネームは筑波二郎。以後風見は毎号『文化茨城』にエッセイを寄せた。

「鼎談　政治と言論」『改造』1951年９月号

志冨實氏所蔵

緒方竹虎、松本重治との鼎談。

『祖国』

1952年　大学史資料センター所蔵

「この祖国の、不平等条約にしばられるという、うらぶれはてたすがたをながめては、自責のおもいに、むねはふさがれるのである。したがって、また、祖国たてなおしのためには、力およばずとも、人一ばいに、ほねもおり、人一ばいに、はたらきもしなければならないと、ひそかにおのれに、むちうちもするのである」。

推薦状（はがき）

1952年９月　大学史資料センター所蔵

戦後はじめて風見が立候補した際に支援者へ送られた、西園寺公一と菅原通済の推薦状。

選挙公報　1952年10月１日執行衆議院議員選挙茨城第三区

1952年10月　大学史資料センター所蔵

「私は再軍備に反対します。……再軍備するよりも、吾々八千万民族は、世界にむかつて、軍備縮少をさけび、戦争の危険をとおざけるのが、民族の、ただしい方針です」。

7　未来への遺言

この画像は著作権の関係で表示できません。

周恩来首相との会談
1957年９月（風見博太郎氏所蔵）

代議士に復活した風見は、平和憲法擁護と日中・日ソ国交回復に全力で取り組んだ。1954年１月風見は憲法擁護国民連合の代表委員となった。風見は平和憲法を戦争で命を落とした人びとの血の結晶と考えていた。それゆえ改憲を目指す保守勢力と闘うために、翌55年１月左派社会党へ入党し、10月の左右社会党統一では党の顧問となった。

日ソ国交回復後、風見は1957年９月に日中国交回復国民会議の理事長として中国を訪問し、周恩来首相と会談するなど、日中国交回復に精力的に取り組んだ。だが岸信介内閣の下で日中関係は悪化の一途をたどった。風見が細川嘉六や中島健蔵らと58年７月に「反省」の声明を発表したのは、まさにそうした中でのことであった。

1959年に入ると、風見の健康に衰えが見えはじめた。60年11月戦前から数えて９度目の当選を果たしたものの、その病状は一段と悪化していった。そして1961年12月20日、風見は75年の人生に幕を降ろした。中国との国交回復と平和憲法に根ざした国家の実現を未来に託して。

［展示資料］

「憲法擁護国民連合運動方針」

1954年１月　大学史資料センター所蔵

1954年１月憲法擁護国民連合が結成された。議長は片山哲、風見は有田八郎、海野普吉、原彪、三輪寿壮と共に代表委員となった。

謝南光書翰　風見章宛

1955年３月４日付　風見博太郎氏所蔵

1951年夏、台湾生まれで戦時中重慶で日本研究所所長だった謝南光と、風見ははじめて会談した。風見は謝との出会いにより、中華人民共和国とのつながりを持つことになった。

「近況報告」

1957年７月　志冨實氏所蔵

支援者に宛てた近況報告。中国と国交を回復し、経済的に提携していくことが国策の根本であると述べている。

「反省」

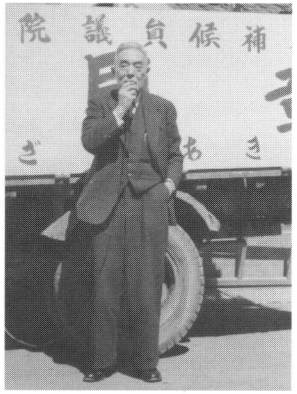
1958年７月20日　志冨實氏所蔵

細川嘉六・伊藤武雄・中島健蔵と連名で公表したもの。「われわれは過去の侵略戦争によつて中国人民に与えた絶大な苦痛を忘れることはできない。この人道上の責任に対する深刻な反省なしには日本民族将来の発展はありえない」。

第二十九回選挙　議員バッジ

1960年　風見博太郎氏所蔵

1960年11月の総選挙で当選した際の風見最後の議員バッジ。選挙戦中、体調がすぐれない風見に代わって演説会の壇上に立ったのは、作家住井すゑであった。



衆院選演説中
（志冨實氏所蔵）

「衆議院本会議議席表」

『毎日新聞』1960年12月18日　志冨實氏所蔵

風見と同じ列には、河上丈太郎、杉山元治郎、和田博雄、河野密といった、日本社会党の錚々たる面々が並んでいる。

原稿

1961年10月　志冨實氏所蔵

『文化茨城』1961年10月１日号に掲載された、風見最後の原稿。この中で風見は、中学時代の同窓石橋周也と、1945年３月の空襲で爆死したジャーナリスト日森虎雄を偲んでいる。

墓碑銘「巨海納百川」（拓本）

飯沼敦氏拓本制作　風見博太郎氏所蔵

水海道高野の風見の墓碑には、「巨海納百川　章」とのみ記されている。

この画像は著作権の関係で
表示できません。

墓碑銘（拓本）